



ROMEO AND JULIET

BY

WILLIAM SHAKESPEARE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

TOKYO

KENKYUSHA

1929



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



昭和四年十月廿七日 印刷

昭和四年十月 卅 日 發行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎

東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所

東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地

電話九段四〇二・四〇三番

振替口座東京二八六〇一番



非 賣 品



新榮社製本所

は し が き

Romeo and Juliet は Shakespeare の劇としては最も古く日本に傳はつたものゝ一つで、明治十九年既に河島敬藏さいふ人が「露妙樹利戯曲春情浮世之夢」と題し、又同二十年には木下新三郎さいふ人が「仇結奇の赤繩(あかじゆ)西洋娘節用」と題して翻譯或は翻案されて居る。其後も坪内逍遙博士のほか戸澤姑射、久米正雄氏等の譯が出て居り、上演されたことも明治三十七年以來再三に止まらなかつたやうである。随つてこの劇の筋は我國に於ては可成り一般に知れわたつてゐるが、全部に亘つての註譯は今回が初めてであらうと思ふ。

巻頭の寫眞は 'Felton' Portrait と稱し、1792 年の auction sale で世に出たものであるが、それが Felton さいふ人の手に渡り、後に Baroness Burdett-Coutts の所有に歸したのであるが、誠によく出來てゐて恐らく本物に近いものであらうと察せられる。

昭和四年九月

市河三喜

CONTENTS

INTRODUCTION

	PAGE
I. “ROMEO AND JULIET” について	i
II. 梗 概	vi
III. 登場人物及びその性格について	xii

ROMEO AND JULIET

ACT I	3
” II	34
” III	62
” IV	96
” V	114

NOTES	133
-----------------	-----

INDEX TO NOTES	235
--------------------------	-----

INTRODUCTION

I. “ROMEO AND JULIET” について

Romeo and Juliet が何時書かれたかは正確には明らかでない。これについての學者の意見も決定的のものはない。以前はこの劇の中で (I. iii. 22, 35) Nurse が「地震があつてから今日で十一年になる」といつてゐるのをもちゐて、その頃の地震といへば 1580 年にあつたといふところから、この作の年代を 1591 年とする學者が多かつたが、最近の研究は、劇の内の事實からこの劇の date を決めようとする。即ち、この劇が *Love's Labour's Lost*, *Two Gentlemen of Verona*, *Midsummer-Night's Dream* などと、如何にも若々しい生き生きとした氣分に充ちてゐることや、多くの句が、叙情的性質を多分に帶びてゐることや、韻を踏んだ行、ことに、alternate rhymes が比較的多いことや、alliteration や、言葉の遊戲が目立つて多いことなどから判斷して、この劇は、Shakespeare がまた三十歳にならない前、即ち 1591-2 年頃の作であらうといふことに大體意見が一致してゐる。そして、これが、後になつて訂正され、補はれて完成したのが 1596-8 年頃だといふことにも大體異論がないやうである。

Neilson, Thorndike 兩氏はその共著 *Facts about Shakespeare* 中で、非常に細かな表を作つて掲げてゐる。これは、作の内容の方面から、年代を知るのに大に暗示的のものと思ふから、こゝにそれを借りて擧げることとする。下のは、そのうちの純粹に Shakespeare の作とされてゐるもののみの表である。表中 Fem. Endings とあるのは Feminine Endings のことで、Shakespeare に於いては iambic

pentameter (×' | ×' | ×' | ×' | ×' |) の最後に、unstressed syllable がつくことがある、例へば

Thy purpose marriage, send me word to-morrow (II. ii. 44)

かういふ line は彼の晩年の作ほど多くなつてゐる。また 'Run-on Line' は 'End-stopped Line' に對したもので、行の終りに pause がなくて、直ちに次行へつゞく line を指す。例へば

When presently through all thy veins shall run

A cold and drowsy humour, for no pulse

Shall keep his native progress but surcease. (IV. ii. 95-7)

このうち最初二行の終りには pause がない。かういふ Run-on line も、後期の作に於いてその率が高くなつてゐる。次の表中著作の date に關しては勿論異論があるのである。

	Total. No. of Lines	Prose	Blank Verse	Pentameter Rhymes	% Blank Verse W. Fem. Endings	% Run-on Lines	% Speeches Ending within the Lines	Date
L.L.L.	2789	1086	579	1028	7.7	18.4	10.0	1591
C. of E.	1770	240	1150	380	16.6	12.9	0.6	1591
T.G.V.	2060	409	1510	116	18.4	12.4	5.8	1591-2
R. III.	3599	55	3374	170	19.5	13.1	2.9	1593
K. J.	2553	0	2403	150	6.3	17.7	12.7	1593
R. & J.	3002	405	2111	486	8.2	14.2	14.9	1594-5
M.N.D.	2251	441	878	731	7.3	13.2	17.3	1594-5
R. II.	2644	0	2107	537	11.0	19.9	7.3	1595
Merch.	2705	673	1896	93	17.6	21.5	22.2	1595-6
1 Hy. IV.	3170	1464	1622	84	5.1	22.8	14.2	1597
2 Hy. IV.	3437	1860	1417	74	16.3	21.4	16.8	1598
M.W.W.	3018	2703	227	69	27.2	20.1	20.5	1598
Hy. V.	3320	1531	1678	101	20.5	21.8	18.3	1599
M. Ado.	2823	2106	643	40	22.9	19.3	20.7	1599
J. C.	2440	165	2241	34	19.7	19.3	20.3	1599
A.Y.L.I.	2904	1681	925	71	25.5	17.1	21.6	1599-600
T. N.	2684	1741	763	120	25.6	14.7	36.3	1601
T. & C.	2423	1186	2025	196	23.8	27.4	31.3	1601-2

A.W.W.	2781	1453	1234	2801	29.4	28.4	74.0	1602
Hml.	3124	1208	2490	81	22.6	23.1	51.6	1602, 1603
Meas.	2879	1134	1574	73	26.1	23.0	51.4	1603
Oth.	3324	541	2672	86	28.1	1.95	41.4	1604
Lear	3298	903	2238	74	28.5	29.3	40.9	1605-6
Mcb.	1993	158	1588	118	26.3	36.6	77.2	1606
A. & C.	3064	255	2761	42	26.5	43.3	77.5	1607-8
Cor.	3392	829	2521	42	28.4	45.9	79.0	1609
Cym.	3448	638	2505	107	30.7	46.0	85.0	1610
W. T.	2750	844	1825	0	32.9	37.5	87.6	1611
Tmp.	2068	458	1458	2	35.4	41.5	84.5	1611

Romeo and Juliet の初演は恐らく Curtain Theatre に於いて行はれたのであらう。初めて出版されたのは 1597 年で、これが First Quarto である。Second Quarto は 1599 年、Third Quarto は 1609 年、Fourth Quarto は date が附してない、Fifth Quarto は 1637 年に出版された。このうち First Quarto は Pirated edition たゞとされてゐる。即ち、劇場での臺辭を速記して、それを著者の許可なくして出版したものである。Second Quarto は原稿の transcription をもにしたもので、First Quarto が 2232 行であるのに對してこれは 3007 行あり、text としては最も信頼が出来るものである。但し、これは transcription である爲所々不注意の誤がある、さういふ點は First Quarto に對照することによつて正すことが出来ることがあるので、その點において First Quarto の存在の意義がある。Third Quarto は Second Quarto をもにしたもので、多少後者の誤を正してゐるが、それよりも澤山の誤を附加した點において劣つてゐる。Fourth Quarto は著者の名が記された最初の版である(“Written by W. Shakespeare”)。そして First Folio (1623) は Third Quarto をもにして出版されたのである。

Romeo and Juliet の話に似てゐて、poison を用ひて heroine が危地を逃れる仕組は Massuccio di Salerno が 1476 年に出版した *Novellino* の中に見出されるが、scene は Siena で、二人の戀人は別

の名を持つてゐるし、二つの家族の間の争ひはない。Luigi da Porto が 1530 年頃に出版した *La Giuletta* では場面が Verona に移され、戀人の名が、Romeo と Giuletta となり、二人が、互に敵視してゐる家の子となつてゐる。これは Italy で廣く讀まれた、1553 年には Gherardo Bolderi が “the unhappy love of two faithful lovers Giulia and Romeo” といふ epic poem を書き、それを盲戯曲家 Groto が悲劇にして *Hadriana* と呼んだ。次いで 1554 年には Bandello が *Novelle* の中にこの話をおさめて出した。この散文譯は前二著に比するに更に複雑で、我々の *Romeo and Juliet* に餘程近いものになつて來てゐる。この話は Alps 山脈や Pyrenees 山脈を越えて廣く讀まれた。英國においてはこの翻譯が二つの形においてなされた。その一は Arthur Brooke (又は Broke) の韻文譯 *Romeus and Juliet* (1562) で、他は Paynter の散文譯 *Palace of Pleasure* (1567) である。Shakespeare が材料を借りたのは、主として前者からである。しかし、こゝに忘れてならないことは、その Brooke が「同じ主題のものが最近舞臺にかけられた」のを見たところがあるを云つてゐる點である。Shakespeare が、今日まで傳はつてゐないさういふ芝居から、ざれただけの暗示を得、またざれただけ借りたかは知るに由がないけれども、當時、この話が一般に興味をもたれ、壁掛などに Juliet の姿が tragic heroine として畫かれてゐた證據がある。

Brooke は、Italy で行はれてゐた話に、當時の英國の趣味にあふやうな附加をした、そして Shakespeare は、材料を殆んどそのまゝ Brooke から得てゐるを云つてもよい程である。しかし Shakespeare においては、それが有機的に結合し、渾然たる藝術になつてゐる。その著しい一二の例を挙げるならば、Brooke においては、兩家の確執が漠然たる背景をなしてゐるのに過ぎないのに、Shakespeare においては、それが、悲劇の缺くべからざる條件となつてゐる。

Brooke においては、二人が結婚してから少くとも三ヶ月は幸福な生活をつづけてゐるのに、Shakespeare においては、激情の流れを、一層急にして、更に美しいものにするために、Juliet を十四歳の、人生の経験のない、殉情的の少女にし、且つ結婚してから悲劇の大團圓までを僅々數日の短い間に縮めた。そして、Brooke の中においては、殆んど名だけを擧げられてゐるに過ぎないと言つてもよい Mercutio を使つて、悲劇の流れを急轉直下させてゐる。さういふ譯は Mercutio があゝいふ性格でなければ Tybalt との喧嘩もなく、従つて彼に殺されることもない、そして Mercutio が殺されなければ Romeo が Tybalt を殺すほど激することもなく、従つて追放されることもなかつたであらう。Richard Grant White が、Brooke の作と Shakespeare のそれとを比較して次のやうに云つてゐるのは、幾分の割引には必要とするけれど、興味ある言葉である。

“In brief, *Romeo and Juliet* owes to Shakespeare only its dramatic form and its poetic decoration. But what an exception is the latter! It is to say that the earth owes to the sun only its verdure and its balm, the heavens only their azure and their glow.”

劇進行の時間は P.A. Daniell 氏の研究によれば、舞臺に演ぜられる事件は六日にわたり、次の如くである。

- | | |
|------------------|---|
| Day 1. (Sunday) | Act I., and Act II. sc. i. and ii. |
| „ 2. (Monday) | Act II. sc. iii.—vi., Act III. sc. i.—iv. |
| „ 3. (Tuesday) | Act III. sc. v., Act IV. sc. i.—iii. |
| „ 4. (Wednesday) | Act IV. sc. iv—v. |
| „ 5. (Thursday) | Act V. |
| „ 6. (Friday) | End of Act V. sc. iii. |

II. 梗概

Chorus 登場。Verona における互に争へる二名家に生れた薄幸の戀と、彼等の死に至るまで解けなかつた親同志の憎しみを今から二時間の間に演ずる由を告ぐ。(Prologue)

Verona 街、Capulet の家來 Sampson と Gregory さが、劍と圓楯さを持つて登場。Montague の飼犬を見ても腹が立つなと云つてゐるところへ、Montague の家來 Abraham と Balthasar さが来る。Sampson の側から喧嘩を賣つて双方劍を抜いて切り合ふ。そこへ來合せた Montague 方のもので Romeo の友人 Benvolio がその中へ劍を抜いて別け入つて引きわけようとするところへ、Capulet の甥 Tybalt が來て、Benvolio に挑みかゝる。二人が戦ふうちに市民が騒ぎ出し、Capulet が現はれ、次いで Montague が來て、今度は主人同志の争とならうとするところへ、Verona 公 Escalus 登場し兩人を叱責し、再びかゝる騒ぎをするならば命はないものと思へと云ひわたし、Montague 夫婦と Benvolio たけを残して退場。Montague は Romeo がこの争に關係しなかつたことを喜ぶが、此頃の Romeo の憂鬱は何が原因であるか、それが案じられるから探つてくれるやう Benvolio に頼む。丁度そこへ Romeo が來るので夫婦は急いで去る。Benvolio に問ひ訊かれて、Romeo は、叶はぬ戀に悩んでゐることを白狀する。(一幕一場)

Verona 街上。Capulet と Paris 登場。Paris は、Capulet の女 Juliet に結婚を申し込んでゐたのでその返事を促す。「娘は何分また十四たから、だが、直接あたつてみて下さい、また、幸ひ今宵は家で宴會を催すから、その席に集つた最上の女をお擇び下さい」といふやうなさりさめの返事をして、側に居た家來のものに、今夜招待すべき人の名を書いたものを渡し案内に廻るやうに命じ、Paris と退場。そこへ通りかゝつた Romeo と Benvolio

をは、Capulet の家來が、書付に書いてある字を尋ねたことから、今宵宴會があること、その宴會には Romeo が戀ひこがれてゐる Rosaline が來ることを知り、二人は窃にその宴會に行くこととする。(一幕二場)

Capulet の家の中、Capulet 夫人、娘 Juliet に Paris から結婚の申込があつたから、今夜の宴會によく彼を見て好きになり結婚するやうにさ云ひふくめる。傍に居る乳母の饒舌によつて、Juliet の歳が十四歳であることも、時が Lammastide (八月一日)より二週間前の眞夏であることも、地震が十一年前にあつたこともわかる。(一幕三場)

街上、Capulet の家の前。Romeo は巡禮に假裝し、Benvolio、Mercutio もそれぞれ假裝して出てくる。Romeo は昨夜の夢見がわるく、非業の死をさけるやうなことが起りはしないかといふ豫感の爲に、家にはいるのを切りに躊躇する。(一幕四場)

Capulet の家の廣間。夜。従僕どもが、食事のあさを片付けたところへ Capulet 等入り來り、假裝した Romeo 等を、それさ知らないで歓迎する。Romeo はある騎士さ踊つてゐる Juliet を見てその美しさに魅せられ、見惚れてゐるのを、Tybalt が感づき、斬らうさわめくのを、Capulet 切りに制し、ついに叱りつける。Tybalt 憤つて退場。やがて Romeo, Juliet に近づき、こゝに二人は所謂 “love at first sight” に落ちいる。その甘い瞬間に乳母が、母からたさいつて Juliet を呼びに來る。Juliet が去つたあさで、Romeo は乳母から、Juliet が敵 Capulet の娘であることを知り、自分の命は敵の借物だと歎く。客の去つたあさ、Juliet も乳母から Romeo が誰であるかを知り驚き歎く。(一幕五場)

Chorus が登場し、はかなき戀に悩む二人が、限りない危険の中に逢ふ瀬を楽しむことになつたことを告げる。(二幕 Prologue)

Capulet の庭園の塀に沿うてゐる小徑。Romeo 塀を攀ぢ登り、

塀の内に飛びおりる。彼の姿を見失つた Mercutio と Benvolio とは、彼を呼ぶけれども答へないので、今頃戀人と逢つてゐるたらうなぞと冗談を云ひながら去る。(二幕一場)

Capulet の家の庭園。夜。忍び込んで來た Romeo は、バルコニーに現はれた Juliet が、彼に對する切なる戀を獨語するのを立ち聞きし、彼女が、この身も心も受けとつて下さいといふところへ、おゝ受取りませうといひつゝ姿を現はす。Juliet 敵地に來てゐる Romeo の身を氣づかひつゝ、また、奥から呼ぶ乳母に一二度さへきられつゝ、甘い戀の言葉を交はし、最後に、いつ結婚式を舉げるか、明日使を出すから、それに返事をしてくれるやう、Romeo に頼む。(二幕二場)

Laurence の庵室の前の藥草園。早朝。Laurence が藥草を集めてゐるところへ、Romeo が來て、Juliet との戀を打ち明け、今日結婚させて下さいと願ふ。「あれほどまでに思つてゐた Rosaline を諦めて、もう他に心を移したのか」と驚くが、敵同志の子を結婚させることは兩家の間を和睦させるのに役立つかも知れないと云つて承諾する。(二幕三場)

街上、朝九時頃。Mercutio と Benvolio とが昨晩 Romeo が何處へ行つたか家をあけた不在中に Tybalt から決闘狀が來てゐると話してゐる時、Romeo が晴々した顔で登場し、Mercutio との間に冗談を交はしてゐるところへ、Juliet の乳母が、Peter を從へて Romeo を探しに來る。Mercutio は乳母にからかひながら Benvolio とともに去る。「今日晝過ぎに結婚させて貰ふから、Juliet に、Laurence の庵室まで來るやうに」この傳言を乳母にたのみ、彼女に金を握らせ、なほ、Juliet と逢ふ爲の繩梯子を持たせてやることにすると云ふ。乳母、Romeo に好意を示しつゝ退場。(二幕四場)

Juliet の部屋。Juliet が待ちこがれてゐるところへ、歸つて來た乳母が、息切れがしたといつて散々ぢらして、漸く、Laurence の

庵へ急いで行けと云ふ。(二幕五場)

Laurence の庵室。結婚する爲に來た Romeo に、Laurence が、烈しすぎる戀は、はげしい結果を生むことを諭してゐるところへ、Juliet が來て、これから結婚式といふことになる。(二幕六場)

街上、Mercutio、Benvolio 冗談を云つてゐるところへ、Tybalt 等が來る。Mercutio の方から喧嘩を賣り、將に斬り合はうとする時、Romeo が通りかゝつたので、Tybalt は、Mercutio を棄てゝ Romeo に挑みかゝる。最前、Juliet が結婚したばかりの Romeo は、今は Capulet の味方だといふことをほめかさうとするが通じない。Tybalt はますますいきり立ち、見かねて Mercutio が、Romeo に代つて Tybalt と戦ひ、反つて刺されて仆れる、Tybalt 去り、Benvolio、Mercutio を介抱しながら去るが、やがて、また來て彼の死を傳へる。それをきゝ Romeo は初めて Tybalt に對する怒りに燃え、再び出て來た Tybalt に突きかゝり、ついに彼を仆す。Benvolio は Romeo を案じ逃げ去らせる。市民騒ぎ Verona 公、Capulet 夫妻、Montague 夫妻等が來る。Benvolio は公爵に向つて、事の顛末を語り、非は Tybalt にあると述べる。Capulet の妻、Tybalt の血の償ひを要求してやまず。公爵、兩家への見せしめに、Romeo に追放を申し渡す。(三幕一場)

Juliet の部屋。Romeo に逢へる夜を待つ Juliet の獨白。そこへ、Romeo からの繩梯子を持つて乳母が、あたふたと駆け込み、Tybalt の死と、Romeo の追放を告げる。Juliet、氣も顛倒し、Tybalt の死を悼むあまり、Romeo を罵り、やがて罵つたことを自ら責め、激情の嵐に極度にかき亂されるが、絶望のうちに、Romeo が隠れてゐるといふ Laurence の庵室へゆき指環を渡し、暇乞に來るやうに傳へよと乳母に頼む。(三幕二場)

Laurence の庵室。Romeo は追放されると聞いて、仰向けに倒れ髪を掻きむしり狂亂の體、Laurence それを慰めるのに困じ果てゝ

あるところへ、Juliet の乳母が訪ねてきて、Juliet も同様に告げる。Juliet の名を聞いて幾分静まつた Romeo に、Laurence は、徒に歎くは男らしくないと言ひ、追放先の Mantua にある間に、折を見て、二人が結婚したことを公にして兩家の確執を解いて、公爵に赦免を願つてやるから、今夜は、夜番の置かれぬうちに、Juliet に暇乞に逢ひにゆけと言ふ。乳母も安心して、Juliet からの指環を Romeo に渡して去る。(三幕三場)

Capulet の家の一室。夜、Capulet は Paris に娘 Juliet を與へること、及び、結婚式を三日後の木曜日に定めることを約し、妻には、今夜 Juliet にその旨傳へるやう命ずる。(三幕四場)

Juliet の部屋の見晴しの廻廊 (loggia)。曉近し。夜が明けないうちに Verona を去らなければならない Romeo は、Juliet と別れを惜しむ。乳母が現はれて、Juliet の母がこちらへ来る由を告げるので、Romeo 仕方なく繩梯子を下り去る。母は娘が Tybalt の死を悼んでゐるもののみ考へ、讐の Romeo を討つてやるを慰める。Juliet 悲しい心でそれに調子を合せてゐるを、母は、木曜日に Paris と結婚させることに決つたと言ひ告げる。Juliet はまた結婚はしたくないと言つてゐるところへ、父が入つて来て、Juliet が結婚を喜ばぬのを知り、散々罵り、引摺つて行つても約束通り結婚させる言ひ捨てゝ去る。Juliet 母にすがる。母、さりとてあはすに去る。乳母、追放の Romeo より立派な Paris を選ぶやうに言ひ、打つて變つた忠告をする。Juliet 今はこれまでを、絶望の胸をいたいて、Laurence に救ひを求めることにする。(三幕五場)

Laurence の庵室。Paris は Laurence に木曜日の結婚のことを告げてゐるところへ、Juliet が入ってくるのを見て狎れ狎れしく話しかける。Laurence の要求で Paris が去つた時、Juliet は Laurence に救ひを求め、その道がなければ自害しようと言ひ懐剣をさし出す。それを見て Laurence 決心して、四十二時間假死の状態に人間をお

く毒藥を與へ、明日、これを飲み、息も脈搏も絶えたならば家のものは死んだと思つて遺骸安置所に葬るだらう、その間に Romeo に使をやり、おん身が眠りから覺めるまでに、こゝへ来るやう取計はうと云ふ。(四幕一場)

Capulet の家の一室。Capulet が結婚の日の料理人のことを云ひつけてゐるところへ、Juliet が歸つて來て、うはべは、Laurence に諭されてさきの言葉を悔い、これからよく父母の訓へ吩咐に従ふと云ふ。父、大いに喜び Laurence を賞め稱へ、自ら Paris の家へ準備を促しに出かける。(四幕二場)

Juliet の居間。夜。Juliet 乳母と母とを却けて、Laurence から貰つた藥壺を取りあげ飲まうとする時、色々の疑惑が起つて來て躊躇するが、遂に、Tybalt の幽霊が Romeo を追ひかける幻を見て、“Romeo, I come!” と云つて飲み干し、倒れる。(四幕三場)

Capulet の家。夜。Capulet 夫妻は夜を徹して召使どもを督して、明日の結婚の準備をしてゐる。朝になり Paris が來たことを知らせる音樂の音が聞えてくる。Capulet は乳母に Juliet を起すやうに命ずる。(四幕四場)

Juliet の部屋。彼女を起しに來た乳母が、彼女が死んでゐるのを見て大騒ぎとなる。Capulet 夫妻が失望と悲歎にくれてゐるところへ、Paris が來て、いたく落膽する。一同、Laurence に誠められて葬式の準備をすることとなる。(四幕五場)

Mantua 街。Romeo は昨夜見た Juliet の夢に考へ耽つてゐるところへ、家來の Balthasar が來て、Juliet の死を報ずる。Romeo は彼に早馬を雇ふやうに命ずる。死を決し、貧しい藥種屋に大金を與へて、國禁の毒藥を買ふ。(五幕一場)

Verona 街。Laurence の庵室。Laurence は計畫を書いた手紙を、Romeo のところへ持たせてやつたのだが、その使の John は、同行の僧が疫病患者を訪ねた爲、二人とも檢疫の役人に禁足されて使

命を果さず、手紙を持ち歸る。Laurence はこゝ三時間のうちに Juliet が目を覚ますからこいふので墓場へゆくことにする。(五幕二場)

墓場。曉近き夜。Paris は侍童に炬火と Juliet に捧ぐべき花をを持たせて、侍童に張番をさせておいて、花を捧げる。ところへ、Romeo は Balthasar に炬火、鶴嘴などを持たせて来る。それを受けとり、今から Juliet の身についてゐる指環などを大切な用に供する爲外すのた云つて、Balthasar を遠ざけ、墓の扉をこぢ開けようとしてゐるところへ、Paris が現はれて、騒ぎ立てるので、Romeo は劍を抜いて彼と争ひ、彼を仆す。Romeo 仆れた Paris を見て今更驚き、彼を憐み、安置所の中に死體を置き、やがて、Juliet の死體に寄りかゝり毒を仰いで死ぬ。その時 Laurence が来て、事が破れたのを知り、驚いてゐるうちに Juliet は假死の状態から蘇生する。Laurence 外に人聲がするのをきゝ、言葉短かに、事が破れ、Romeo も Paris も非業の死を遂げたここをつけて、あはてゝ墓を逃げ去る。Juliet は夜番が近づくけはひに、Romeo の短劍を抜いて死を急ぐ。やがて番兵どもは、各々、侍童 Balthasar, Laurence を連れて登場。Verona 公、Capulet 夫妻、Montague 夫妻も騒ぎを聞きつけて、駈けつけてくる。そして、これらの人々の前で、Laurence, Balthasar 及び侍童の三人は、事の顛末を語る。聞き終つた公爵は、Capulet と Montague に向つて、かゝる悲劇が起つたのも皆汝等の確執の天罰であり、その確執を見逃してゐた自分も天罰を蒙つて二人まで近親 (Mercutio, Paris) を失つたと歎く。こゝに、相争つて來た兩人の心解け、Montague は Juliet の、Capulet は Romeo の、純金の像を建て、弔はうと申し出る。物悲しけな朝、陽もまた出ない。(五幕三場)

III. 登場人物及びその性格について

"Romeo and Juliet is the only tragedy which Shakespeare has